

江戸時代に作られたナポレオン伝記の話

奥 正敬

■はじめに

今年にはナポレオン・ボナパルト (Napoleon Bonaparte, 1769-1821) の生誕250年の節目の年にあたります。彼が生まれた1769年は日本の江戸時代後半で明和六年にあたり、死去した1821年は文政四年になります。ここでは、海外情報が限られていた鎖国体制の中で、日本人が作った彼の伝記を中心にご紹介いたします。

なお、本学図書館は今秋、彼の生誕250年記念稀観書展示会を「ナポレオン、偉大なるエジプト文明に挑戦する」と題して開催します。本稿でご紹介する書物は、この展示会に出展を予定していますので、19世紀のヨーロッパと日本の歴史を物語る資料としてご確認いただきたいと存じます。

こうしたことから、僭越ではありますが本誌前号の拙稿「ナポレオンのエジプト遠征によって生まれた書物の話」と併せて、展示会への「いざない」とさせていただきますことが出来れば幸いです。

■オランダからの情報の途絶

日本人がナポレオンという人物や彼が関わった戦争のことを知ったのは江戸時代の何時の頃だったのでしょうか。早くは1804 (文化元) 年にロシア使節レザノフが日本へ連れ帰った漂流民の津太夫らの尋問の成果や、1808 (文化五) 年のイギリス船フェートン号が長崎の出島へ不法入港して狼藉を働いた折の水夫からの情報などがあります。その後も1811 (文化八) 年から1813 (文化十) 年にかけてのロシアのゴロヴニンやリコルドなどの接触で、徳川幕府は断片的ではありますがヨーロッパでの一大有事を確認できる情報を得ていたものと思われま。

また、1818 (文政元) 年に儒学者で歴史家、そして詩人でもあった頼山陽 (1780-1832) が長崎を訪れ、出島のオランダ商館の医師から聞いた話をもとに、漢文の詩歌「佛郎王歌」を創ったことが文章での記録としては早い時期のものとされています。

さらに、ナポレオン戦争については幕府が新任のオランダ商館長に提出を義務付けていた海外情報である「風説書」で、1800 (寛政

十二) 年以降はヨーロッパの動向についての記述が希薄になったことや、1810 (文化七) 年以降3年間はオランダ船の来航が途絶えたことなどから、幕閣はヨーロッパ情勢に変化があったことを推測していたと通説になっています。しかし、オランダの風説書は自分の国が消滅したことを日本へ知らせたものはありませんでした。これは、オランダがフランスの圧力を受け始めた頃からの姿勢で、当事国のフランスが徳川幕府の警戒するカトリック教国であって、それを理由にオランダの持つ対日貿易の特権を没収されることを危惧したためとされています。⁽¹⁾ こうしたオランダ側の努力と幕府の追求しない姿勢もあって、ナポレオン戦争の継続中も長崎の出島には世界で唯一か所、オランダ国旗が翻り続けます。

実際にオランダは、日本の出島へ船を送り続けていた最中の1795 (寛政七) 年にフランス革命軍に占領されていました。その後の1805 (文化二) 年にはナポレオンの弟ルイがオランダ国王になり、さらに1810 (文化七) 年にはフランスに併合されました。それによって東洋のオランダの拠点で、同国の日本貿易の中継基地であったジャワはフランスの植民地となり、1811 (文化八) 年にフランスの敵であるイギリス軍によって占領されていたのです。

■江戸時代後半に流布したナポレオン伝

1814 (文化十一) 年にオランダが独立を回復し、翌年ジャワがイギリスからオランダへ返還されると、この島からの定期的な来航が回復します。この時点で頼が詠った前述の漢詩「佛郎王歌」もありましたが、漢文を理解できる知識人を除いて広く流布することはなかったようです。しかし、蘭学に携わる人たちがオランダ語の伝記を翻訳するようになるとそれらの巻頭にこの漢詩が掲げられ、頼の功績が認められます。そして一般の武士階級の人たちがナポレオンという人物を知り始めることとなります。

1832 (天保三) 年ころ、蘭方医で岸和田藩の藩医も務めた小関三英 (1787-1839) が、オランダ人リンデン (Joannes van der Linden, 1756-1835) の著作である“Het Leven van Buonaparte”を